

『金剛手灌頂タントラ』の灌頂について

大 塚 伸 夫

1. はじめに 『金剛手灌頂タントラ』は12巻10章のチベット訳しか存在せず、チベットの密教分類法に従えば、行タントラ (caryātantra) に属する密教經典といえる。最近の研究成果によれば、本經は『大日經』の直接的な先驅經典であったと目されている。そのような『大日經』との関わりから、筆者は別稿で本經の曼荼羅行について論じたことがあるが、小論では本經の曼荼羅行の中でも最大の奥義とされる金剛手灌頂について論ずることにする。それによって、本經における灌頂の実践意義を究明することにした。

さて、本經に説かれる金剛手灌頂には、A：釈尊が普賢菩薩に対して行うものと、B：普賢が上記の灌頂を契機として金剛手菩薩に転換して説くものと二種類が見られる。そのうち、Aの金剛手灌頂とは、本經の第3章前半に説かれており、文脈からすると明かに毘盧遮那如来を背後におく釈尊（毘盧遮那如来の化身）が、『華嚴經』入法界品の思想影響を受けた本經所説の普賢菩薩に対して行ったものといえる。一方、Bの金剛手菩薩の説く金剛手灌頂は、第3章後半より第5章にかけて説かれる曼荼羅行の最後に見られる。これは、釈尊より金剛手灌頂を受けた普賢菩薩が金剛手菩薩という密教の菩薩に転換して、自らが受けた灌頂のシステムを応用することによって、現実世界を活動の場とする一般の密教行者に修習できるよう説いた灌頂といえる。

2. 釈尊による金剛手灌頂 それでは、Aの釈尊による金剛手灌頂にはどのような実践意義が存するのであろうか。まず、その灌頂に至る経緯を概観すると、他化自在天において無数の集会者に囲まれた本經の教主・毘盧遮那如来が、娑婆世界に展開する大金剛鉄围山曼荼羅に釈尊の姿をとって出現する。釈尊が出現したその曼荼羅の住处とは、『華嚴經』入法界品の善財童子が求道の旅の出発点として、文殊菩薩に遭遇した場所 (Danyākaramahānagara-vicitrasārādhvajavyūhamahāvāṣaṇḍa) と同名に設定されている「妙徳生大都城 (Groñ kher chen po dpal yon tan gyi ḥbhuñ)」にある「様々な沙羅樹の幢で飾られた密林 (Siñ sā la sna tshogs

kyi rgyal mtsan bkod paḥi nags tshal stug po)」という場所になっている。そこで、上記の曼荼羅に現れた釈尊は、普賢行に励みつつある普賢菩薩をその場所に召喚するのである。すると、その曼荼羅の住処に赴いた普賢は、自身が毘盧遮那如来の過去の行を円満したものを形に表した毘盧遮那莊嚴楼阁 (rNam par snaḥ mdsad kyi rgyan bkod paḥi khaṅ pa brtsegs pa)」を釈尊に奉獻するのである。この毘盧遮那莊嚴楼阁とは、同じく入法界品では、善財童子が求道の旅の終着点として弥勒菩薩に導き入れられた住処 (Vairocanavyūhālaṃkāragarbha-mahākūṭāgāra) とされているので、本經の金剛手灌頂は明らかに入法界品を意識してストーリーが展開されているのが知られる。そこで、次に釈尊は楼阁を奉獻した普賢菩薩に、六波羅蜜などを象徴するという金剛杵を授与するのである。この作法が本經における事実上の金剛手灌頂とみなすことができるのであるが、その後、普賢菩薩は曼荼羅の集会者に「汝は金剛手である」と宣言され、戴冠することになる。以下、普賢菩薩は様々な真言を釈尊や一切如来たちから授与され、最終的に金剛輪を転ずる金剛手菩薩に加持されるのである。これによって、普賢菩薩は名実ともに密教の菩薩に転換させられたのである。そして、注目すべきはこの後で、普賢菩薩は釈尊より「汝は普賢行の誓願を成就した故に、曼荼羅行の儀軌を説け(趣意)」と諭されるのである。

以上のような文脈を考慮するならば、Aの釈尊による金剛手灌頂は、『華嚴經』入法界品の強い思想影響を受けて構成されていたという点がまずいえる。そして、この視点にたち、金剛手灌頂の実践意義を考えてみれば、このAの釈尊による金剛手灌頂とは、入法界品に説かれる求道の旅の出発点と終着点とを同地に設定した曼荼羅の住処において、入法界品の理想の菩薩像である普賢菩薩に対し、金剛杵を授けて自らの誓願とする普賢行を成就終了させ、新たな役割を担う密教の菩薩へと転換させる、いわば密教化の儀式であったと捉えることができる。しかし、視点を変えてみると、それは後述するBの金剛手菩薩の説く金剛手灌頂が、あくまでも現実世界で有効に機能するのを保証させるために、經典作者が考え出した創作劇であったとみることもできる。むしろ、この点にこそAの釈尊による金剛手灌頂の実践意義が存在していたといえるであろう。

3. 金剛手菩薩の説く金剛手灌頂 それでは、Bの金剛手菩薩の説く金剛手灌頂には一体どのような実践意義が存しているのであろうか。この灌頂を含む曼荼羅行の儀軌を概観してみると、まず、阿闍梨は曼荼羅行を行うための土地や日時を

選定する。それらが決定されると、釈尊が現れた大金剛鉄围山曼荼羅に対応する土壇の大曼荼羅を作る作法が次に行われる。如法に曼荼羅が完成されると、次に曼荼羅の諸尊を供養する作法、灌頂する弟子の有縁の尊格を決定する投華得仏の作法、そして最後に、灌頂の作法が行われるのである。とくに灌頂の作法を見ると、この作法はおおよそ、1. 灌頂壇の造立、2. 瓶灌頂、3. 金剛杵授与、4. 法輪授与、5. 教戒、6. 三昧耶説示の六階梯になっている。

そこで、改めてこのBの金剛手灌頂の次第を見てみると、実際には我々の現実世界で行われる灌頂といえるが、弟子を選定して曼荼羅を作り、金剛杵を授与して金剛手灌頂するというわけであるから、Aの釈尊による金剛手灌頂とまったく同じシステムで構成されているといえる。要は、Aの釈尊による金剛手灌頂のシステムを現実の世界に応用したのが、このBの金剛手灌頂であるといえよう。どのように応用しているかといえば、Aの灌頂では阿闍梨に相当する者が釈尊であったのが、Bの灌頂ではそれを現実の世界で行う金剛阿闍梨に設定しているわけである。そして、弟子については普賢菩薩であったのに対し、Bの灌頂では一般の大乗仏教徒に設定しているわけである。

それでは、Bの金剛手菩薩の説く金剛手灌頂の実践意義を考えてみると、Aの釈尊による金剛手灌頂によって、普賢菩薩が自らの誓願とする普賢行を成就終了し、新たな密教の菩薩へと転換させられたように、このBの灌頂でもそのシステムを応用して、大乗仏教徒に六波羅蜜などを象徴する金剛杵を授けて灌頂することによって、大乗仏教の理想である波羅蜜行を無時間的に円満成就させて密教の世界に誘い、新たに金剛杵を持つ執金剛、つまり密教の菩薩に転換させるというのが、このBの金剛手菩薩の説く金剛手灌頂の実践意義であったと考える。

4. おわりに 以上、本経の説く金剛手灌頂について論じてきたが、思うに金剛手灌頂とは、釈尊による普賢菩薩への灌頂という演出によって保証された第一段階の金剛手灌頂の有効性を巧みに利用して、大乗仏教徒たちに自らが信奉する波羅蜜行を無時間のうちに円満成就させ、波羅蜜行にとって代わる新たな仏道体系である密教の行を大乗仏教徒たちに実践させようとしたのが、この金剛手灌頂であったと主張したい。

〈キーワード〉『金剛手灌頂タントラ』、灌頂、金剛杵

（大正大学総合仏教研究所研究員）